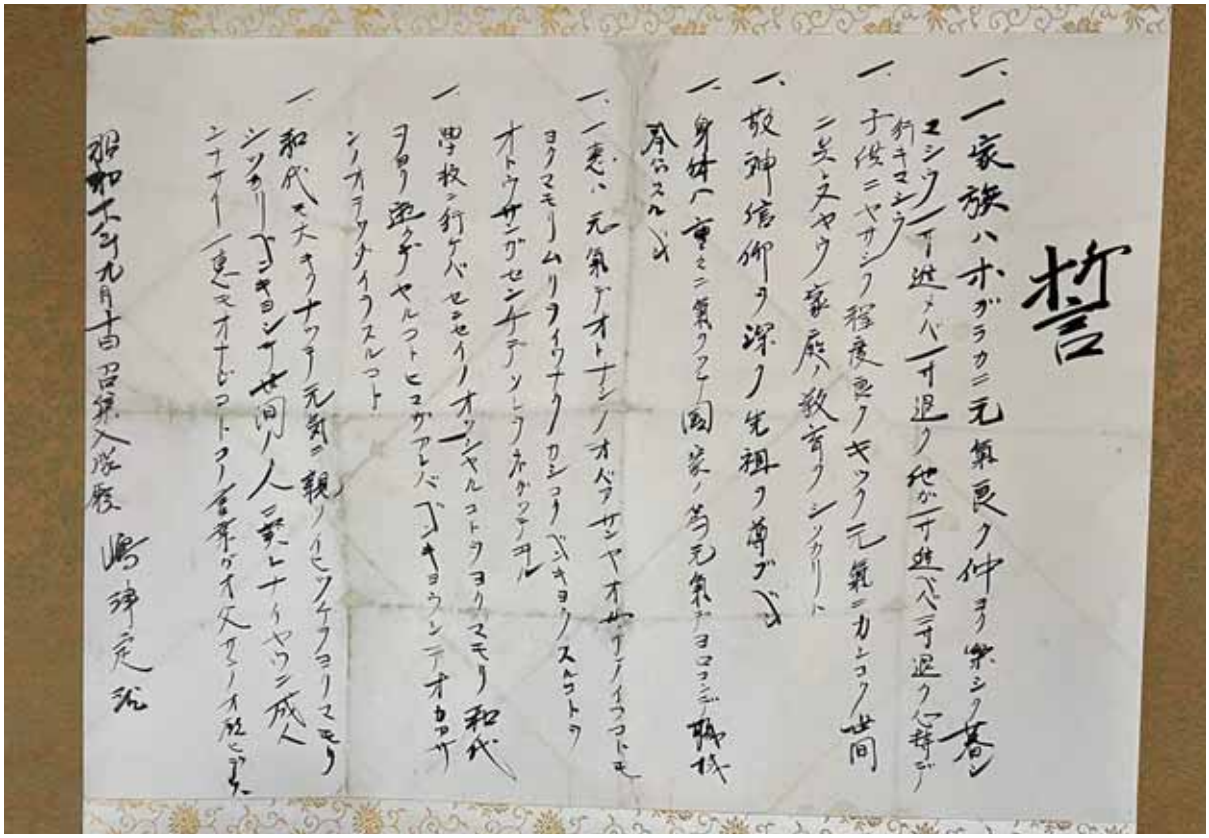
ホームページアドレス　http://www.himeji-gokoku.jp/

安寧

兵庫縣姫路護國神社社報
「安寧」第三十二号
発行所　兵庫縣姫路護國神社
〒六七〇―〇〇二二　姫路市本町一一八
電話　〇七九―二二四―〇八九六

安寧（あんねい…世の中が穏やかで平和なこと）



誓

一、一家族ハホガラカニ元氣良ク仲ヨク楽シク暮シ
マシタ一寸進メバ一寸退ク他ガ一寸進ベバ三寸退ク心得デ
行キマセウ
一、子供ニヤサシク程度ノキツク元氣ニカシコク世間
ニ笑ハレヌ家庭ノ教育ヲシンカリト
一、故神信仰ヲ深ク先祖ヲ尊ブベシ
一、身体ハ常ニ第一ニ国家ノ為元氣デヨロコンデ奉仕
致シマスベシ
一、老ハ元氣デオトナシクオ父サンヤオ母サンノイフコトモ
ヨクマモリムリヲイワナクカシコクベキヨクスルコトノ
オトウサンガセンチテソレヲ忘ルナカレ
一、學校ニ行ケバセセイノオツヤンコトヲヨクマモリ和氏
ヨリ迎チヤルコトヒマガアレバゴキョウシテオカサ
ンノオラクダイフスルコト
一、和氏ハ大キクナルマデ元気デ親ノイヒツケヲヨクマモリ
シンカリゴキヨウシテ世間ノ人ニ笑ハレヌヤウニ成ル
ベキナイ一度ニオナジコトヲ二度ガイケナイ

昭和十三年九月十四日　召集入隊後　嶋津定治

嶋津定治命（揖保郡（現たつの市）出身）の出征時に家族に残した文章（2頁「父の願い」参照）

父の願い

嶋津　一惠（いちえ）

仏間に父の遺影が揚げてある。徽章のついた帽子を被り軍服を着た父の姿である。アルバムには、庭の石灯籠の前での出征姿、面会に行った時であろうと思われる母とのツーショット、背広姿など数葉の写真が張ってある。

「あなた、お父さんの顔覚えていますか」

と何度か尋ねられたことがあるが、生の顔は知らない。写真で覚えている。その証拠に全員学生帽で同じような絣の着物、そして下駄を履いた五十名くらいの青年男子ばかりの集合写真で十代の父を識別することが出来た。

父が出征したのは、私四歳七ヶ月・妹一歳十ヶ月である。私と妹は、こんな幼い時に父と今生の別れをしている。

平成五年、父の五十回忌の法事を前に家を片付けていたら父が入隊する前に書いた紙が出てきた。節目の法事にお参りしてくださった親戚の皆さんに披露した。

「よく出てきたね。」

「額に入れて大事にしときよ。」

等の言葉をもらったので、私は掛け軸にして保存している。（表紙下段写真）

七十年を越してきた紙は、今、茶色に変色し折り目は虫が所々食べている。しかし、筆で書かれた文字から自分が出征した後の家族が仲良く暮らすように思いやる家族愛が溢れ出ている数々の言の葉。長女の私へは九つのことが書いてあり期待が大きかったことが今ずっしりと響いてくる。

父二十七歳。母と妻そして頑是無い子ども二人。女ばかりを残して戦争に行かねばならない現実。日本の国策とはいえ戦争の拡大で男子は紙一枚の命により軍隊に駆り出されるのが当たり前の現実。男泣きに泣きながら書いたのだろうか。墨書された筆跡旧字体のままを摸写する私は涙が止まらない。

当時の様子を義弟（父の妹婿）勝原正夫は、自伝の中で父のことを次のように述べている。

「はる子（父の妹）が一番頼りに思い、兄（父）も又一人の妹を一番可愛がってくれたそうであるが、その兄は、私たちの結婚の翌昭和十八年九月十日鳥取大地震の日に召集になり、その又一ヵ年後長女迪代の誕生を知らせることも出来ないまま、ニューギニア島で戦死してしまった。はる子は娘時代、どちらかと言えば弱い方であったので、結婚後の健康を兄はいつも氣にかけてくれたという。元気で子供が出来たことを知らせてやれば、どんなによろこんでくれただろうにと、今も悔んでいる。」

父が戦地で祈っていてくれていたお陰・先祖のお陰で私も妹も健康に恵まれ、大きな病気にかかることなく七十歳を越した。それぞれ子供・孫にも恵まれた。父が残した二人の姉妹の家族は今、合わせて十八人となっている。まだ増えるかもしれない。

「お父さん、お母さんが柱の十九人の家族が見えますか！」

父が最も気にしている世間の人に笑われないようにとの言葉を今一度反芻して身を修め、慎んで暮らすべく心を引き締めようとこれを書きながら思っている私である。　平成二十五年十二月二十五日記す

ありがとう通信　№61

嶋津定治命（陸軍上等兵昭和十九年九月二十五日ニューギニアウエワクにて戦死）

令和六年度　崇敬奉賛会総会開催　四月十五日

令和六年度崇敬奉賛会総会が、四月十五日（月）午前十時三十分より参集殿二階安寧の間で開催された。理事以上の会員三十一名（委任七名含む）の参加があった。これに先立ち、午前十時より崇敬奉賛会安泰祈願祭が、本殿に於いて斎行された。

総会では、木南一志運営委員の司会のもと、参加者全員で国歌斉唱。その後、三宅知行会長と泉和慶宮司よりそれぞれご挨拶をいただいた。阿比野剛運営委員長が議長に就任し、議事が進められた。

議案については、令和五年度の各報告と令和六年度の計画等及び新役員が提案された。また、令和七年には、大東亜戦争終結八十年を迎えるにあたり、臨時大祭及び事業計画案が示された。この節目の年にあたり会員の意識も高まり、各事業に向けての協力と支援を確認しあった。これらの議案は参加会員により、それぞれ慎重審議され、承認可決された。

総会終了後には、直会が催され、釜谷研造副会長の乾杯のご発声により、歓談が始まり会員相互の懇親を深めた。終始和やかな雰囲気の中で、「崇敬奉賛会の会員の増強」について等、崇敬奉賛会が盛会になるための情報交換等がなされた。

直会の締めのご挨拶は、三木英一副会長による今後の崇敬奉賛会への熱い思いが語られ、お開きとなった。　（文責　崇敬奉賛会理事　尼子尚公）

令和六年度　春季例大祭斎行　五月二日

新緑の映える晴天の下、令和六年度春季例大祭が厳かに斎行された。県下各地より、ご遺族を始め関係者が集い、午前十時半より本殿において、泉宮司以下神職の手により祭祀が行われ、ご英霊が鎮座される本殿の御扉が開かれ、遺族、崇敬者より寄せられた御饌、神酒や淡交会西播磨支部、西

播磨青年部による抹茶と菓子が献じられた後、宮司によりご祭神を慰霊する祝詞が奏上され、祖国、故郷を思い戦禍に斃れられたご英霊に参列者一同が祈りを捧げた。

三木大祭委員長、三宅奉賛会長、北浦県遺族会会長の祭文が奉読され、姫路吟剣詩舞道連盟による扇舞「護国の英霊に捧ぐ」、姫路市民合唱団により「護国の桜」、「浜ちどり」の合唱が奉納された後、西播磨、東播磨、但馬地区のご遺族代表、陸上自衛隊姫路駐屯地司令、参列議員代表、参列者を代表して兵庫県神社庁、三木通嗣副庁長が玉串を奉奠、各代表に合わせて参列者も拝礼し、祭典は滞りなく終えられた。

祭典後、宮司よりこの四月一日付で靖國神社宮司に就任された大塚海夫氏が書かれた文章を引いて、大塚氏は、ご英霊の遺書を拝読されて、兵士が従容として戦場に赴いたのは、眼前にある祖国の危機を打開しようとしたことはもとより、次の世代の日本が平和であることを強く願っていたゆえのふるまいだと感じられたと綴られていることを紹介され、自身も大祭の本義は明治以来国難に殉じた人たちを大事な祖先の一人として敬い感謝することにあり、国難に立ち向かわれた大御稜威をいただき、令和の御代が平和で国家安泰でありますことを皆様と祈りたい。と挨拶された。

大祭後には、参集殿にて直会が行われ、和やかな雰囲気の中、来賓、関係者がご祭神の恩頼を受けられ、その後散会となった。

（崇敬奉賛会理事　戸井田真太郎）

英霊感謝祭　八月十五日
英霊顕彰の集い

「ビルマの戦い」をテーマに
六年ぶりの全面開催

終戦から七十九年目となる八月十五日、令和六年の英霊感謝祭・英霊顕彰の集いが行われた。平成三十年以降、台風接近や新型コロナウイルスの感染拡大のため、行事の時間短縮やパネル展のみの実施など、制限された中でしか実施できなかったが、六年ぶりに全面開催できることになった。

酷暑の中、午前十時から「英霊感謝祭」が厳粛に執り行われ、約一五〇名が本殿前や境内に集まった。泉和慶宮司の祝詞奏上、巫女のみたまなごめの舞があり、三木英一崇敬奉賛会副会長が参列者を代表して玉串を捧げた。終了後、泉宮司は、パリ五輪で卓球の早田選手が特攻資料館に行きたいとコメントしたことにふれ、「七十九年も経つと様々なことが風化されるが、今の当たり前は先人の力である」と話した。

午前十時半からは参集殿二階に移動し、「英霊顕彰の集い」を開催。会場には一〇〇名余りが参加し、立ち見になるほどであった。阿比野剛崇敬奉賛会運営委員長は開会挨拶で、南海トラフ地震臨時情報に関連し、自然災害に乗じて周辺国が動いた時に日本は大丈夫なのか、と現在の日本を取り巻く状況に警鐘を鳴らした。

三木副会長は「大東亜会議とは」と題し、昭和十八年十一月に東京で開かれた初の有色人種のみによる首脳会議とそこで採択された大東亜共同宣言の解説を行い、主旨にある白人支配からの解放と自主独立、人種差別撤廃に、当時の日本が努力してきたことを話した。

続いて、陸上自衛隊OBの曽田孝一郎常任理事の解説「インパール作戦」では、「作戦は失敗したが、過酷な状況下でも日本兵は体力・気力ともに凄かった。彼らはビルマ・インドの独立を守るために亡くなった」と語った。この日のために書き下ろした朗読劇二編「ビルマの独立を支えた日本兵」、「奮戦！姫路百十一聯隊～インパールからビルマまで」が披露され、姫路で編成された歩兵第百十一連隊が参戦し、奮闘する姿を描いた。テレビ・新聞の特集等では語られることのない郷土の兵士たちの実状に迫った。

閉会挨拶に立った尼子尚公理事は、全國護國神社會が作成した終戦八十年のポスターを手にし、「日本人は節目を大事にする民族。節目を大事にして強く生きていきたい」と集いを締めくくった。

（崇敬奉賛会理事　深田　真史）

【英霊顕彰の集い/各演目の出演者】

- 「英霊の言乃葉」
  - 朗読　高島洋子・加藤元美
  - 　　高見裕子・三村　恵
- 朗読劇「ビルマの独立を支えた日本軍」
  - 原作　前川英昭
  - 朗読　三村　恵
- 「大東亜会議とは」
  - 解説　三木英一
- 「インパール作戦」
  - 解説　曽田孝一郎
- 朗読劇「奮戦！姫路百十一聯隊
  - インパールからビルマまで」
  - 原作　前川英昭
  - 朗読　高見裕子・戸井田真太郎
  - 　　大西　豊・深田真史
- 「日本を唱う」
  - ボーカル　野上愉三子
  - ピアノ　尼子美保
  - バイオリン　前川美加

シリーズ 英霊の戦場（二十三）

特攻隊員の思いを永遠に（陸軍編）

■序文

日本軍はレイテ決戦で連合国に苦戦を強いて有利な条件で停戦交渉をする戦略で臨んだ。海軍は敵の主力艦隊を誘引する囮艦隊を編成しレイテ方面に南下させ、誘引に成功。その間に戦艦大和・武蔵等をレイテ湾に突入させ敵上陸軍と輸送船団を壊滅させる作戦であったが不成功に終わった。

レイテを制した連合国軍はルソン島に進攻、海軍は二五〇機の戦爆編隊で敵艦隊を攻撃したが戦果を得られない上約二〇〇機を失う大敗北を喫した。昭和十九年十月大西海軍中将は起死回生は「特攻」しか無いと判断し、爆装ゼロ戦五機で出撃させ、敵空母一隻撃沈、護衛艦二隻大破した戦果は全軍に特攻の威力を認識させた。日本も開戦前から航空機の増産と共に飛行兵の増員及び爆装ボート（マルレ）と空挺要員の養成に邁進していた。

そしてこの若い兵の大半が陸軍の特攻兵として「悠久の大義※に生きる」を自覚し祖国の安寧を信じて出撃して行った。今号は陸軍の特攻について紹介する。

※大義…天皇及び国民が苦難な時に臣民として最善を尽くす義務。

■陸軍の特攻採用の経緯

昭和十八年暮れ大艦隊で来襲する敵侵攻軍に対して陸軍も艦船攻撃の必要性が浮上、爆撃隊と襲撃隊に雷撃訓練の重要性が認識された。機体の改修には特攻統率上の問題で決心が逡巡したが翌年三月特攻戦法の採用を決意した。

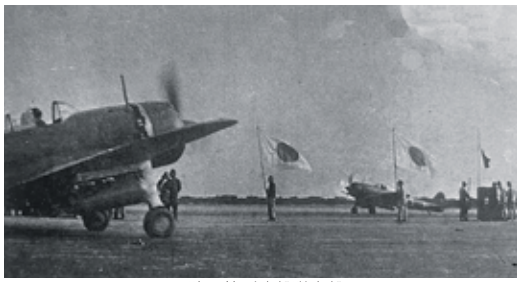
五月二十七日敵艦隊がビアク島（ニューギニア島北西部）に集結しているとの情報で陸軍の爆装戦闘機四機が出撃した際、一機が対空砲火に被弾し敵駆逐艦に自爆突入し同艦を撃沈する戦果が報告され、特攻戦法の有効性が強く意識された。

各基地で陸軍”特攻隊”を編成

七月特攻機用として一部の機体に改修が終了して訓練を開始したが、統率に外れる戦法は天皇の統帥権を超える危惧が浮かび採用に逡巡。

十月第一線指揮官が臨機に定めた部隊編成の一つとして「特攻」する案で決着。ここに陸海軍ほぼ同時期に特攻作戦が開始された。

陸軍特攻隊は万朶隊（九九式軽爆撃機）として十月二十一日茨城県の鉾田教導飛行師団で編成、二十四日には富嶽隊（四式重爆）が浜松教導飛行師団で編成。両飛行隊は直ちにルソン島に進出。


陸軍特別攻撃隊出撃

陸軍最初の特攻は十一月十二日万朶隊三機が直掩機十一機に護られてレイテ湾内の大型艦船二隻と小型艦船一隻に突入した。続いて十三日富嶽隊五機が同湾内の敵艦に突入した。

レイテ決戦が苦戦に陥った陸軍は敵地上航空基地隊の戦力破壊を目的に空挺特攻を実施した。

■黛・高千穂空挺特攻（強行着陸方式）

一回目…十一月二十七日夜間、台湾の高砂族義勇兵二〇名含む六〇名が四機の輸送機に分乗して実施したが、不時着や着陸失敗等で組織的急襲が出来ず不成功に。

二回目…十二月六日、高千穂部隊の四七四名が輸送機三〇機に分乗し煙弾幕構成任務の重爆一三機と直掩機三〇機に護られ、必成を期して出撃したが降下中輸送機一八機が対空砲で撃墜される等不運が重なった。強行着陸した特攻隊員は地上部隊との連携により一部の敵基地襲撃に成功した。然し予期の戦果が得られず作戦中止命令で撤退した。

三回目…十一日隠密急襲を企図して輸送機一機で実施したが撃墜され全員戦死した。

■レイテ決戦以降の特攻作戦（）は海軍機数

昭和二十年、マッカーサー将軍は「アイ・シャル・リターン」の約束を果たすためにルソン島奪還を目指して上陸作戦を準備した。日本陸軍はこれを予期してモーターボートに爆雷を搭載して敵艦に体当たりする特攻艇マルレ（陸軍海上挺進隊）をマニラ湾に一三〇隻、リンガエン湾に七〇隻、その他上陸予想地点二か所に四〇〇隻、計六〇〇隻を配備して対上陸戦に備えた。

＊陸軍海上挺進隊：特攻艇・通称マルレ ㋹

爆装ボートを敵艦に体当たりさせて撃沈させる着想は海軍より早く（昭和十八年十一月）当初は秘匿名・連絡艇として開発製造され、艇尾に二五〇キロ爆薬を搭載して敵艦に接舷すると、爆薬を投下して離脱し生還可能な仕組みの爆装艇を主兵器とした陸軍海上挺進隊が新編された。

間もなく接舷と同時に艇ごと爆発する特攻兵器として改造されると「四式肉薄特攻艇」と命名された。初陣は昭和二十年一月九日、米軍のリンガエン湾上陸に併せて同湾で待機のマルレが出撃し歩兵揚陸艦一隻と輸送船一隻撃沈、戦車揚陸艦四隻損傷、十日には歩兵揚陸艦二隻、駆逐艦・兵員輸送艦・戦車揚陸艦、貨物船各一隻に損傷を与えた。

中部太平洋の米軍は硫黄島に二月十九日上陸し、海軍の特攻と陸軍の善戦で苦戦しながら三月十七日占領した。陸海軍は「米軍は次は沖縄に上陸を開始する」と予期して三月マルレ三〇〇隻を慶良間列島に隠匿配備して、米軍の上陸に備えていたが、上陸前に同列島が占領され、大半の特攻艇を処分した。

尚、処分を免れた艇がその後出撃し駆逐艦と上陸艇に損傷を与えた。又、マルレを失った陸軍海上挺進隊は沖縄地上戦部隊として奮闘した。

米軍の沖縄上陸時の日本軍保有航空機数は陸軍約一二〇〇機、海軍は約一〇〇〇機であった。四月八日戦艦大和の出撃に呼応して陸軍は第一特別振武隊として四月六日～九日迄九九機（二五〇機）出撃、撃沈四隻・撃破二八隻の戦果挙げた。

陸軍の特攻艇 ㋹ マルレ

この戦果の要因は大和が多数の敵航空機を引き付けていた為と分析された。尚、戦果は陸海軍合同である。その後四月十日から五月十一日まで三五〇機を出撃させた。五月中旬敵の後方を攪乱して苦戦する沖縄守備隊の敢闘精神を鼓舞する目的で義烈空挺隊特攻が二十四日出撃した。

＊義烈空挺隊（義号作戦）

重爆一二機に一六八名（搭乗員三二名含む）が分乗して出撃、途中五機がエンジン不調と敵夜間戦闘機の妨害等で帰還、二機が嘉手納方面に向かったまま行方不明に、五機が敵の読谷航空基地に向かった。その内四機が対空砲火で撃墜され一機が強行着陸に成功し、十二名の隊員が基地内の戦闘機三機・輸送機四機を破壊、二九機を損傷させ航空燃料約三〇万リットルを焼失させた後、全員戦死した。

”義烈空挺隊”健軍飛行場を発進

沖縄戦間で特攻出撃させた陸軍総機数は八九〇機、海軍は九七一機であった。

沖縄地上戦終了後、日本軍は一隊六機編制の特攻隊を新たに三〇〇隊編制する計画を立て、特攻専用機「キー115剣」の生産を開始した。

七月に入ると敵艦隊の防空能力が格段に向上し、特攻に拠る戦果が得られ難くなった。又、国内の航空燃料も不足して充分な飛行練習も出来ない特攻隊員や指導する特攻隊指揮官にも心理的な焦りが生じて来た。然し海軍は台湾の飛行隊からも出撃させ終戦まで特攻作戦を続けた。陸軍は本土決戦を視野に七月に二回だけ特攻出撃をした。

八月一日には一四八飛行隊二五二〇機を揃え本土決戦に備えた。（海軍は二五〇〇機）然し出撃する機会が無いまま終戦を迎えた。

戦死した特攻隊員数（柱）

海軍　四一五六　内訳　航空隊二五三一　特潜四四〇　回天一〇四　震洋一〇八一

陸軍　二四四〇　内訳　航空隊一四一七　空挺隊七五八　海上挺進隊二六五

皇国の安寧を祈る遺書
英霊の言乃葉集から原文で転載

第六四振武隊隊長
陸軍少佐　渋谷健一命
昭和二十年六月十一日沖縄付近で戦死
山形県出身　三十一歳

出撃に際して倫子、生まれる愛子へ

父は選ばれて攻撃隊長となり、隊員十一名、年端僅か二十歳に足らぬ若桜と共に決戦の先駆となる。死せずとも戦に勝つ術あらんと考えうるは常人の浅はかな思慮にして、必ず死すと定まりて、それにて全軍敵に総体当たりを行ひ、尚且つ、現戦局の勝敗は神のみぞ知り給ふ。真に国難といふべきなり。父は死にても死するにあらず、悠久の大義に生きるなり。

一、寂しがりやの子に成さるべからず母あるにあらずや、父も又幼少にして父母を病にて亡くしたれど決して明るさを失わずに成長したり。まして戦に出て壮烈に死すと聞かば日の本の子は喜ぶ

べきものなり。父恋しと思はば、空を視よ、大空に浮かぶ白雲にのりて父は常に微笑で迎ふ。

二、素直に育てよ、戦勝っても国難は去るにあらず、世界に平和がおとずれて万民太平の幸をうけるまで懸命の勉強をすることが大切なり。二人仲良く母と共に父の祖先を祭りて明るく暮らすは父に対して最大の孝養なり。父は飛行将校として栄の任務を心から喜び、神明に真の春を招来する神風たらんとす。皇恩の有難さを常に感謝し世は変わるとも忠孝の心は片時も忘るべからず。

三、御身等の母はまことに良き母、父在世中は飛行将校の妻は数多くあれども、母程日本婦人としての覚悟ある者少し。父は常に感謝しありたり。

戦時多忙の身にして真に母を幸福にあらしめる機会少なく、父の心残りの一つなり。御身等成長せし時には父の分まで母に孝養つくさるべし。之父の頼みなり現時敵爆撃機の為大都市等にて家は焼かれ、父母を亡ひし少年少女数限りなし。之を思へば父は心痛極まりなし。御身等は母、祖父母に抱かれて真に幸福に育ちたるを忘れるべからず。書置く事は多けれど、大きくなったる時は良く母に聞き母の苦労を知り決して我儘せぬやう望む。

第六一振武隊隊長
陸軍大尉　若杉潤二郎命
昭和二十年四月二十八日沖縄付近で戦死
長崎県出身　二十五歳

部下のため祈って下さい

先日は突然帰って驚きの事だったろうと想います。早速お便りを差上げやうと思い乍ら、さて改まって書くこともなく過ごして来ました。　何の親孝行も出来ず心苦しく思います。二十六年幸せだったと心から思います。有難う御座いました。

自分も小隊長として可愛い部下三名、十九と二十の若武者を引きつれて突撃して征きます。花はつぼみと言ひますが本当に清らかなものです。篠原・田中・山本の三伍長です。この手紙がつく頃は見事戦果をあげてみせます。自分よりこの三人の可愛い部下の為祈ってやって下さい。くれぐれも御身大切に長命を祈って居ります。お元気でお元気でお過ごし下さる様。では征きます。必ずやりますから御心配なく。

皇国の　弥栄祈り　玉と散る
心のうちぞ　たのしかりける

母上様

母から贈られた花嫁人形を持って出撃する少年隊員

少年特攻隊員
未婚で出撃する息子に母が天国で結婚出来るように花嫁人形を持たせた。
犬は置いていったようである。

第四三二振武特攻隊
陸軍少尉　若尾達夫命
昭和二十年五月二十八日沖縄付近で戦死
神奈川県出身　二十二歳

出撃前夜の便り

出撃の前夜　心は何時もと少しも変わらぬ平静です。自分の今の心境は唯必沈あるのみです。今米鬼の攻撃を目の前に見て志気愈々旺盛なり。最後の飛び立つ飛行場は九州の最南西端知覧飛行場です。此処から六〇〇キロ飛んで沖縄に行き、敵艦上に突込みます。

勿論帰路のガソリンは有りません。若し敵艦が見つからなかったならば、島でも、敵陣地でも敵の居る処に突っ込む覚悟であります。達夫は最後まで元気で御國の為に喜んで散華して行きます。では呉々も御体大切に、達夫の分まで永生きして下さい。

身はたとへ　愛機と共に　砕くとも
魂永久に　國ぞ護らん

若櫻　春をも待たで　散りしゆく
嵐の中に　枝を離れて

御両親様

戦友の遺骨を胸に抱き、共に出撃する特攻隊員

参考文献
防衛省戦史叢書　陸軍航空作戦
防衛省戦史叢書　海軍捷号作戦
太平洋戦争研究会　特攻

（文責　崇敬奉賛会理事　曽田孝一郎）

終戦八十年事業　趣意書

令和七年は、先の大戦が終わって八十年の節目の年にあたります。

戦後、日本は戦火に見舞われることなく平和な時代を享受することができました。これは護國神社に祀られてるご祭神（英霊）の礎の上に築かれたものであります。

英霊の残された言葉には、家族を、郷土を、そしてこの日本を守ろうとする覚悟があふれています。護國神社の祭祀の意味は、国難に殉じた人たちをその大事な先祖の一人としてうやまい感謝することであり、命を懸けて国家を守られた先人に報いる生き方とはなにかを常に考える場でもあります。

敗戦後、占領下のなかで、護國神社は存亡の危機に見舞われましたが、様々な方策で乗り切ってきました。また、御遺族、御戦友等神社を直接支える崇敬者の人たちの努力や、再び豊かさを取り戻した国民の力で日々の祭祀は欠かすことなく継続されています。

しかし、ご英霊の意思や記憶が、風化され、さらには、戦後を支えてきた方々が高齢になり、次代への継承も進んでいません。このような向かい風の中で、神社の護持のため、崇敬奉賛会活動等、未来に向けての努力が続けられています。

この戦後八十年という大きな節目は、享受している平和の尊さを知るために、ご英霊の事績を振り返り、未来を背負う若者たちにつないでいく絶好の機会であります。

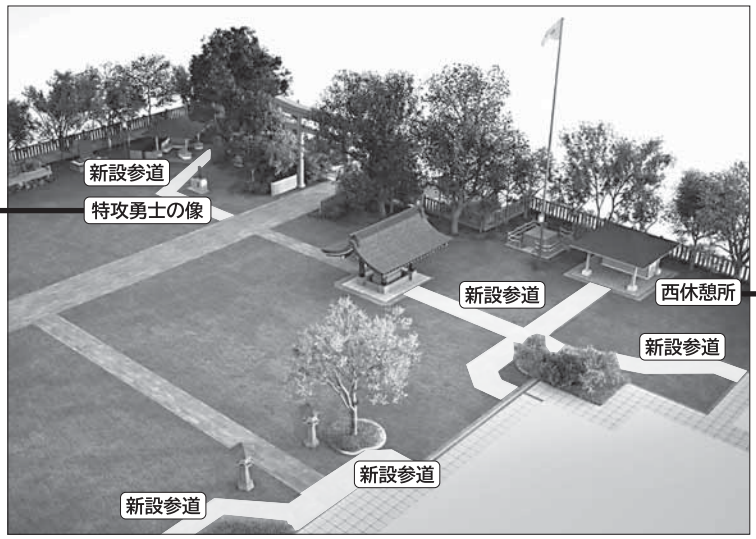
歴代の天皇陛下は戦後十年ごとに全国の護國神社に幣饌料をご下賜されています。来る令和七年秋はそのお供えを奉持し臨時大祭を予定致しております。

その日に向けて兵庫縣姫路護國神社では、特攻勇士の像の建立、足の不自由な方や車椅子の方、ご高齢の方に本殿迄お参りいただける石参道の増設、西の東屋の建立、等より整った環境でご英霊をお偲び頂けるように計画致しております。どうか多くの方々に趣旨をご理解いただきこの大事な神社を未来へ継承してまいりましょう。

兵庫縣姫路護國神社　総代会長　三木　英一
兵庫縣姫路護國神社　崇敬奉賛会長　三宅　知行
兵庫縣姫路護國神社　宮　司　泉　和慶

事業総額	五千万円
事業内容	1、大東亜戦争終結80年臨時奉幣祭の斎行（令和7年11月2日） 1、英霊顕彰　特別講演会の実施 1、特攻勇士の像の建立 1、石参道の増設 1、西休憩所の新築
募金期間	令和6年9月～令和7年6月

西休憩所完成予想図▶



▼特攻勇士の像完成予想図

「ポスター掲示のお願い」

終戦八十年に向けて…

日本国は、明治維新以降、二百四十六万人を越える戦死者があり、家系を辿るとどこかにその先祖にたどり着きます。ある意味国民すべてが、遺族ともいえるのではないでしょうか。

護國神社の祭祀は、国難に殉じた人たちを、大事な先祖の一人として、うやまい感謝することであり、命を懸けて国家を守られた先人に報いる生き方とはなにかを、常に考える場でもあると思います。

令和七年の年が明けると全国五十二社の護國神社の終戦八十年臨時大祭の日程がそれぞれに決定されます。その日を中心に、国民が改めてご英霊の崇高な精神に触れることを願っています。終戦八十年に向けて全國護國神社會では日本中にいきわたるようにと共通ポスターを作製しました。

ぜひすべての人々にご英霊の声が届くようにお力を頂きたいと存じます。このポスターを人目に付くところで許可をいただいた場所に貼っていただけますかたは護國神社へお越し頂けましたらお分かち致します。

（大きさはA1です。）